



矢島 渚男 選

初空に大王松のきらめきぬ

東京都 松永 京子

【評】大王松は北米から明治の末頃に移植されてきた貴族のある大型の松である。松かさの長さが20〜30センチにもなるという。そんな松の木が新年の空に聳えている。

冬の蟬知りつくしての静止かな

神奈川県 石原美枝子

【評】この室内のことは何もかも知り尽くした、アナタのこともね。だから、飛び回ることもないと言わんばかりに、じっと動かない蟬、昨日と同じ所にいる。私と同じように。

書き初めの二枚の半紙震へをり

神奈川県 山上ふみ子

【評】書初用の半紙を前にして緊張している。一枚の予備はあるが、どうも紙まで震えているように思われる。

日に光りをり山茶花の花の芯

越谷市 安居院半樹

意地張つてスマホは持たず去年今年羽子の音やがて小さくなりけり

栃木県 あらあひとし

已年来る能登大地震一年後

相模原市 はやし 央

七草の足らぬも腹の温もりぬ

川口市 高橋まさお

組板は厨の楽器被刻む

湖南市 原 茂幸

わづかつつ治る腰痛春を待つ

埼玉県 安高 正夫

牛久市 中村 栄子

高野ムツ才 選

地震の死者弔ふ如く寒島

神戸市 岸下 庄二

【評】阪神・淡路大震災の死者を悼む句といふことは寒島から判断できる。六連星が六千人以上の死に哀悼の光を捧げている。ちょうど三十年前の寒中、晩冬の悲劇だった。

とほくまできたねと風の落葉たち

広島市 甲野 裕之

【評】どこからどう来たかは想像するしかないが、たとえば、山間しか知らない落葉が高層ビルの間を転がっているのかもしれない。

満員のバスや聖葉は膝の上

新潟市 大竹 健一

【評】クリスマスのよくあるシチュエーション。だが、「膝の上」と焦点化したことで、大切に抱えられているケーキがはつきり見える。

節分やいつまで鬼をできるやら

守谷市 久保田洋二

光と凍つてをりぬ黒鮭

小諸市 藤 雪陽

大櫓の枝の細さよ冬の虹

日上市 菊池 風峰

富士を見にいづもの場所へ冬重

東京都 中島 徒雁

金の鶴銀の鶴折り年用意

船橋市 中島 紺

目鼻立ちキリリとすまし冬木立

東大阪市 木田 博幸

初東風や句帳にはさむ乗車券

北上市 佐々木清志

正木ゆう子 選

潮力は月の引力牡蠣肥ゆる

横浜市 菅沼 葉二

【評】中七までは科学的事実の範囲内だが、下五で「一挙に五感が刺激される。軟体の触感、潮の香り、味、さらに「肥ゆる」の一語が、満潮や満月を連想させて、豊かな印象。

春キャベツ切れ切れ売られて売られけり

東京都 藤ヶ谷国柱

【評】野菜の高騰で、半分どころか、四分の一に切って売っているキャベツ。農家も八百屋さんも、キャベツ必須のトンカツ屋さんも大変。

胡桃割り割れずに語る栗鼠のこと

松江市 稲葉 豊美

【評】確かに、胡桃割りに四苦八苦しながら必ず思うのは栗鼠のこと。こんなに固い物を道具も無しに割るとは、どんな歯をしているのだろう。

立石寺この世の雪が降るばかり

土浦市 古目谷和男

金色のかすかに残る手毬かな

大阪市 大塚 俊雄

鳶たかく海の淑気を司り

東京都 芦田 晋作

村は市となり獅子舞の来なくなり

東大阪市 渡辺美智子

曇天の比叡風籠りをり

大津市 竹村 哲男

寒島宗派さておき寺が好き

前橋市 小林 始

ラッセル車出たぞ怪獣雪を吐く

周南市 原田 英夫

小澤 實 選

下半身こたつ男が動けない

守口市 小杉なんぎん

【評】寒くてこたつから出られない自分自身を「下半身こたつ男」という造語で呼んでいるわけだ。なかなかうまい。動けず、何もできないままに時間だけが過ぎていく。

静電気放つ我が身は何者ぞ

水戸市 加藤木よういち

【評】静電気を放っている私の体は、いったい何者であるのか、という。「静電気」は冬にかけて発生しやすい、冬の季節語になりつつある。

温かいうどんへ落とす寒卵

松山市 久保 栗

【評】鉢に盛られたうどんへと向かって、寒卵が割られ、落とされている。うどんに届くと、卵の白身はさつと白く曇るのである。

面子打つ袖はてかてか水漬

川越市 益子さとし

大根は鶏糞育ちみどり濃し

神戸市 吉野 勝子

八畳に十一人が屠蘇の膳

神戸市 久下 明

雪原に鳥海山の影ありけり

秋田市 松井 憲一

懐手任侠映画見て日暮

池田市 後藤 和豊

熱燗や戦友逆さし父の黙

長岡市 林 惣峰

絵を踏むも女泣き伏し捕へらる

名古屋市 可知 豊親

偏愛のすすめ

短歌あれこれ 江戸雪 (歌人)

短歌を「ふしぎな楽器」と語りつた永井陽子。愛してやまない短歌という詩型に音楽性をもとめたのだ。永井はモーツァルトに傾倒し、「クラリネット協奏曲Ⅰ長調K.285」の静けさあるいは澄明さを「思想や主題や、人間が持つあらゆる歓喜や憎悪をつぎぬけた、音の流れである」とエッセイに綴っている。クラシック音楽をほとんど聴くことのなかった私だったが、永井陽子のうたの韻律や一回性の生命の煌きに少しでも近づきたいと、モーツァルトのこの協奏曲の入ったCDを買って聴いてみた。三十年前、私のクラシック音楽との出会いである。以来、この協奏曲は荒ぶる魂を鎮めてくれるものとなった。好きな歌人の世界に浸ると人生がちょっぴり変わる。棚からぼた餅、なんて言ったらモーツァルトに叱られそうだけれど。へただ一挺の天与の楽器短歌といふ人体に似てやばらかな楽器 永井陽子



題字デザイン・イラスト 福田美蘭